

平田 雅博(文学部教授)・小名 康之(文学部教授)編
 伊藤 定良(大学学長、文学部教授)・安村 直己(文学部教授)
 相田 洋(文学部教授)・小林 和幸(文学部教授)
 割田 聖史(宮城学院女子大学准教授)
 黒沢 文貴(東京女子大学教授)著



『世界史のなかの帝国と官僚』

山川出版社 2009年3月刊 2,940円
 青山学院大学総合研究所叢書

〔評者〕 飯 島 渉

時代や地域を問わず、官僚は統治機構の中核に位置し、徴税をはじめ、政策を支える存在として、さまざまな役割をはたしてきた。わが国で近代的な官僚制が整備されたのは十九世紀末のことであるが、植民地帝国としての展開、敗戦と占領を経験しながらも、官僚制はほぼ一〇〇年以上にわたって継承され、日本社会に決定的な影響を与えている。他方、今日ほど、官僚への批判が強まった時代もかつてなかった。

本書は、こうした官僚への関心の高まりの中で、近年、歴史学や政治学の領域で議論されることの多い「帝国」論を交錯させながら、本学文学部史学科の教員を中心とした共同研究により、ヨーロッパや中国・インド、そして日本の事例をとりあげ、各地域の官僚(制)の特徴を浮かび上がらせることを企図した論集である。

帝国と官僚をめぐる問題群は、まず、イギリス帝国の植民地高等文官制度に焦点をあてた平田雅博「イギリスの帝国官僚―植民地高等文官制度の変遷」(第一章)とスペイン帝国のメキシコ植民地における地方官僚を考察した安村直己「十八世紀スペイン帝国における地方官僚―近代的統治の技法とスプレデラード」(第三章)によって問題の構図が示される。以上のような植民地帝国における官僚制との比較の視座として、中華帝国を対象とする相田洋「中華帝国の官僚制―その変遷と特徴」

(第五章)とインドのムガル帝国を対象とする小名康之「ムガル帝国の官僚―十六―十七世紀の帝国の宰相」(第四章)の事例が検討される。

また、十九世紀に近代国家への歩みを進めた日本とドイツの事例として、日本については、小林和幸「近代初期の日本官僚制―人員統計から見た明治期の『官制改革』を中心に」(第六章)、黒沢文貴「帝国日本の軍事官僚―大正期陸軍官僚の『革新』化」(第七章)、ドイツは十九世紀に焦点を絞り、プロイセンの事例が、割田聖史「十九世紀プロイセンにおける『帝国官僚』―ポーゼン州長官を事例に」(第二章)によって検討される。

本書は歴史学の領域において、きわめてタイムリーな問題を取りあげ、今後の比較研究(国際比較、ないしは同一地域における変化の分析)の基礎をきづいたものとみることができ。

植民地帝国としての日本については、最近、岡本真希子『植民地官僚の政治史』(三元社、二〇〇八年)や松田利彦・やまだあつし(編)『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(思文閣出版、二〇〇九年)などの成果が出されている。

本書が明らかにした論点は、今後、帝国官僚制度のあり方や植民地統治との関係などの視点から議論されることになろう。

(大学文学部史学科教授)